

口繪の Chance も右と同じ様な意味では無いでせうか。

モデル物語り

△ 生

美術の淵藪なる佛國巴里の畫學校へは、毎月曜日に男女十四五人のモデルが來て雇つて呉れると申込をする。直に裸體に成つて體格を見せる、其骨格や肉著が、畫ふと思ふ畫に適當である。と、四週間五週間の分を豫約する、學校には唯其の住所姓名を書き留めて置く斗りだが、決して違約せずに来る、併稀れに病氣や其他の事情で來ない事があつても、月曜日に來たのを臨時に補充するから毫も不自由はしない、如何なる物をも撰擇する事が出来るが、日本は若し豫約を外された時は、お三どんや乞食の娘の様な物でも満足しなくてはならぬ、又學校以外に畫師は畫室を持つて居る、此畫室は一區域を劃して北方モンマルトルは第一に隆盛で、次は南方モンパルナスで、其外東方西方と有るが、私は南方モンパルナスに畫室を持つて居つた。一棟の中には二三の畫室が有つて、其所にも一日に三人平均位に來て、何でも使つて呉れると云ふまあ體格丈けでも見て呉れると云つて見せる、赤髮のモデルが必要な場合に、赤髮のモデルが來なければ、友人に頼むと直ちに二人位は送て來る。モデルに二種の別が有る、一つは本業のモデルで、重に伊太利人で、佛國に來た祖先傳來のモデルで、夫婦子供も爺婆も一族でモデル營業をなして居る一團がある。其親戚の者も國許より來

つて其群に投ずる、其群の中には羅馬の古畫の如き骨格を有する物もある、此特種の顔や骨格を有する者の中に、キリストと稱する者があつた、鬚を左右に分け、鬚を長く延ばして肩の邊迄垂下して、鼻は高く細長く、細面で口髯は薄くて三十二三才位の男で手を垂れて説教する風を装つた、右の手を揚げて十字架上に登つた態度をするのでキリストの畫題を畫く者のモデルには好適であつた、又ギリシヤの勇士クラジセトールと稱する美術學校の常雇のモデルは筋の發達が圓滿で、體格はギリシヤの彫刻に酷似してゐた、年齢は二十四五才の壯士で、常に筋肉の發達に努めて居る、ゴオル人と稱するは、大兵の五十才位の男で髪は茶色の胡麻鹽頭で、口髯を支那人の如く垂らして妙な劍を横たへ、天を睨む態度は、全然ゴオル人其儘で有る。又バツキユス（ギリシヤの酒の神）と云へるは、六十近き老人で、便々たる腹をもつて髪が長く鬚を生じ、徳利やコップを風呂敷に包んで携帶し、酒を飲つて愉快だと云ふ風を裝ふ此等は重に伊太利人で、畫家が適當と認むるゴオル人やバツキユスに使用するから、モデルが自覺して、私はキリストですラジヤトールですと自稱する、斯いふ風であるからサロンの展覽會には、是も彼バツキユス、是も同じだと云つた様に、同一モデルの繪畫が澤山に出品される。

三山亭より

奈良にて 長谷川繁兒

自分は今年の夏期水彩畫講習會に出席するんだつたが脚氣と云ふ病氣のもとに行くことが出来ない、それで何處かい、所に獨り遊びたいと思つて考へた結果、去年講習會のあつた、奈良、奈良に行くべし、と休暇になると早速出かけた。

三山亭、自分はこの三山亭に二週間住居することになつた、三山亭、懐しくて致方がない、いま二日四日の近況を御知らせせんこれも今年鎌倉へ行けない負惜。

三山亭に假居して居る自分は、去年大下先生の居られた室に座つた、心持がいい、室の四隅に自讚の水彩畫を掲げて見た、あゝ、こんな時に大下先生の寫生畫が一枚でも半枚でもほしい、掲げて置きたいと思つた、手紙でも出して畫を貸りやうか知らと思つたことも度々であつた。

三山亭の姐さんはお松さん、講習會では大分お茶をにごした先生だろ、愛嬌たつぷりな女である。

三山亭へはお客が多い、自分の様な畫を描きに來て居る人は少ない、唯一人あつた、名は葉山、姓は潔、自分と同歳の男、一週間程共に寫生に行つたり競争したりした、葉山君は汚い畫を描く人、自分は無茶苦茶に強彩で畫をかくのが、妙に互にどちらも氣に入つた、お可笑しい、汚い畫と云ふのは、幾度となく色を重ねる、自分ののはたゞ強く日影が當つて居れば、二倍も三倍も強いガンボージでやつつた水彩畫、二人共、畫を描きに來て居るのでない、研究しに來て居るんだから、例のお松さん等に見せたら三文の價もないもんだつた、けれどもこれがな

かく得意で、人が何と云はうか、どんな評をくれやうが、ある一つのものものせいにせいで研究してやまなかつたのが、三山亭に居つての畫の研究、寫生の方法であつた。

大きい聲で二人、琵琶を怒鳴ると、去年のお方より上手だと云ふ、上手かも知れないが得意にそれから毎晩やつた。

葉山君はハモニーカをやる、下手だから誰も嘴を容れる者がない。グス／＼笑はれて居つた、それにもつて來て自分の芝笛は自信からして上手だと思つたから、葉一枚一厘とするなればハモニーカが一圓位とするなれば、安くて自由で面白くて、清音で何處でも木のあるところには要求出来る、芝笛の方がどれだけいいか知れぬ、これも自持の論であつた。

畫はどれだけ描けたか、自分は三十枚程出來た、その三十枚の三十枚ながら強い光線の強色であるから面白い、葉山君は大分描いた。

奈良に居つて奈良を見て、奈良を描いて奈良に俗化しない自分はいつまでも奈良に居たくなつた、奈良は畫趣が豊である、奈良は自分の心と同じ様な風景である、奈良に生れて奈良に死にたい、そんなことで何になる、奈良は奈良だ、奈良は自分の好む尤もいゝ水彩畫だ、あゝ奈良、あゝ奈良、奈良はいゝ處だ、こんなことを葉山君も自分も讚美した程、奈良はいゝ處だつた奈良についで三山亭を思ふ、三山亭、三山亭は自分にとつて又忘れられない名だ。

三山亭に居つて三山亭の飯を食つて居ることが何となし好く

んだ、奈良に居つて思ふこと多し、あゝ奈良、三山亭、二週間。

自分はよくも脚氣になつたことだ、こんなことを思ふと嬉しい、けれどけれど、自分が今年鎌倉へ行つたらどれだけ上手になつて歸ることが出来ただろう、思ふと思ふと口惜しい、そこで、來年は何處に開かれても、行きたい行きたい、行つて大下先生と一日でも日をおくつて見たい、自分は自分で満足の出来る水彩畫を描ける腕が出来たのは、自分の小さい幼い時に畫紙を下さつた藤島武二先生でない、また鹿子木先生でもない、大下先生だ、何故にまた自分は、この三山亭で斯んなに悶へるんだらう武二先生は愛知の中學に居られた時、京都に居られた時、あの畫紙を下さつた、そして何か描いてくれと云はれた時は、水彩畫といふてどんなものか知らなんだ、それを自然的に教へて下さつたのが大下先生だ、斯なことを思つた三山亭は、自分は畫のために生きて居るのでない、畫を生かしてやるうと思つて居つたに相違ない………。

三山亭は落日は、あゝ、もう室の内がぐらくなつた、今日は朝から二枚も寫生が出来たので、それに満足して、日中は葉山君と畫の批評をして遊んで居る、それにも倦んで、何となし自分は興奮して居つたから、三山亭よりとして何か、『みづゑ』に出したくなつて、ここまで書き終つた。

(附)奈良での畫題は一番公園地を多く描いた、草若山は三度も描いた、杉の古木は何度失敗したか知れぬ、一番ものになつたのが、大佛の古門、二月堂、奈良の町、等であつた。

短歌折々記

一輪の花の一つもまたぬ日を茂りて老ひてゆく日かな
しむ

夜は更けて更けて夜はまた更けてはて、心うれしき朝と
なりぬ

セコンドの七時となりぬ八時—九時夜はさながら魂奪
ひゆく

うつらうつら夢は心のくらがりにふさはしと見て覺め
たる朝や

何となく唯何となく短夜をいつはるに似てなつかしき
かな

旅やがて倦みし心をなだめるか奈良の朝毎霞こめたる

日本水彩畫會新會友

福井縣吉田郡森田村温故尋常小學校

平井要

韓國龍山鐵道官舎六十八號ノ二

栗本正隆

韓國龍山鐵道官舎六十八號ノ二

吳藤林二郎

神戸市葺合町千八百九十三

津川清平

静岡縣富士郡今泉村

加藤一松

福井縣阪井郡三國町元新

小林幾太

栃木縣安蘇郡氷室村齋藤氏方

江西藤十